

講演会 & ライブ な日々 ④7

古川 秀明

『般若心経とオープンダイログ 7』

毎晩続く私の夜叫に疲れ果てていた両親は、拝み屋さんから渡された“狐の絵”を、喜々として天井に貼り付けた。なぜかその狐の目だけが、朱色に塗られていた。

それを見た兄が、どこからか1枚のソノシートを持ってきた。

ソノシートは、雑誌の中の世界が紙の向こう側から飛び出してくるような、不思議な体験を与えてくれる。絵本をめくれば横で音声ドラマが流れ、登場人物がページの外から語りかけてくる。物語が、目と耳の両方からやってくる。当時の私は、「これは魔法だ」と本気で思っていた。

ソノシートは、高価なレコードを買えない子どもたちにとって“音の入り口”だった。雑誌を買えば音がついてくる。まるで紙に音声データが貼りついているようなものだ。今の言葉で言えば、QRコードを読み取ると音が流れる——そのアナログ版と言えるかもしれない。

朝日ソノラマは、アニメ主題歌や特撮ヒーローのドラマだけでなく、ニュース音源を収録した『月刊 朝日ソノラマ』という雑誌まで作っていた。ページをめくると、遠い国の出来事や社会の動きが“音”として届く。紙の雑誌が、世界の息づかいをそのまま運んでくる時代だった。

ペラペラの円盤は、子どもたちの部屋で、学校の教室で、友だちの家で、くるくる回りながら、たくさんの物語とニュースを届けていた。

そのとき兄が私に渡したのは、「妖怪・九尾の狐」という絵本とソノシートだった。

兄がプレーヤーに針を落とすと、何とも言えない気味の悪い効果音が流れ出した。1ページ目には、血のような赤い文字で「妖怪・九尾の狐」と書かれている。そこへ女性の声で「よ～かい～きゅうびのきつね～、ワハハハハ」と笑う声が入り、最後に「ぎゃ～」という悲鳴が響いた。

その時点で、私はもうおもしろそうだった。

絵と音声と効果音の“三点セット”は、幼い子どもの心を容赦なく驚愕みにした。

九尾の狐の物語の細部は覚えていない。ただ、千年生きごとに尻尾が一本増える恐ろしい狐の妖怪で、夜な夜な町に現れては人を食い殺す——そんな話だった。

最初は美しい姫の姿をしているが、本性を現すと老婆になり、最後は九尾の狐となって人間をバリバリと食べてしまう。狐が人を食うとき、その目は赤く光る……。

兄が私に言った。

「天井に貼った狐の絵の尻尾を数えてみろ。何本ある？」

私は震える声で「9本」と答えた。

「そうやろ。この絵は、あの九尾の狐が閉じ込められてる絵や」

その言葉を聞いた瞬間、私は足ががくがくと震えた。

そういえば—— さっきの拝み屋さんのおばあさんは、妖怪・九尾の狐が化けていたのかもしれない。そんな仮説まで立ててしまった。

ただでさえ「死んだらどうなるのだろう……」という不安を抱えていたのに、そこへ“人を喰らう恐ろしい狐の妖怪に食べられるかもしれない”という新たな恐怖が加わった。

その夜、布団に入ると、父と母は狐のご利益を信じて、あっさり眠ってしまった。私は怖くて、天井の狐の絵をなかなか見ることができなかった。

しかも悪いことに、昼間に兄から聞かされた 朝日ソノラマの音声付き絵本の物語と効果音が、ヘビーローテーションのように私の頭の中でぐるぐる回り続けた。

この一連の体験は、子どもの心がどのように「恐怖」を学習し、どのように「意味づけ」を行うのかを示す、非常に象徴的なエピソードである。

まず、夜叫という“身体からあふれ出る不安”に対して、両親は「拝み屋さん」「狐の絵」という“外部の力”を導入した。これは、家族が不安に直面したときにしばしば起こる「説明を外側に求める」という行動である。

子どもは、親の不安や期待を敏感に受け取る。天井に貼られた狐の絵は、両親にとっては「守り」だったが、子どもにとっては「恐怖の象徴」になり得る。

そこへ兄が持ってきたソノシートが加わる。音声・効果音・絵という三点セットは、子どもの想像力を一気に増幅させる。特に幼少期は、「現実」と「物語」の境界がまだ柔らかい。そのため、物語の中の妖怪が、自分の部屋の天井に“いるかもしれない”という感覚が容易に生まれてしまう。

兄の言葉——「この絵は九尾の狐が閉じ込められている絵や」という“意味づけ”は、子どもの世界観に強烈に刻まれる。

ここで重要なのは、子どもは「事実」ではなく「語られた意味」を受け取るということだ。

そして、「死んだらどうなるのだろう」という根源的な不安に、「妖怪に食べられるかもしれない」という具体的な恐怖が重なると、心の中で不安が二重構造になる。

このような状態では、夜、布団に入った瞬間に不安が増幅しやすい。親が安心して眠ってしまうと、子どもは「自分だけが恐怖と向き合っている」という孤立感を抱く。

その結果、昼間に聞いた物語や効果音が、頭の中で“ヘビーローテーション”のように回り続ける。これは、子どもの脳が不安を処理できず、繰り返し再生してしまう状態である。

対人援助職としては、このような体験を語る人に出会ったとき、「そのときのあなたは、どれほど心細かっただろう」という視点を持つことが大切だ。

恐怖の内容そのものよりも、恐怖にひとりで向き合わされた“状況”が心の傷として残ることが多い。

そして、こうした体験を語ることは、当時の自分を再び見つめ直し、「孤立した恐怖」を「誰かと共有できる記憶」へと変換する大切なプロセスになる

シンガーソングライター
ふるかわひであき